

謝冰心と小説「惆悵」について

田川めぐみ

本誌に発表した前稿「謝冰心作品の出版状況——一九三〇年代の海賊版について」⁽¹⁾において、筆者は海賊版に収録されている「惆悵」という小説に触れ、この作品を冰心の作品ではない偽作とする考えを述べた。しかし、二〇〇三年十一月に開催された「冰心文学第二屆學術研討會」⁽²⁾において、北京大学中文系教授方錫徳氏が、「惆悵」⁽³⁾を冰心の佚文とする「五四愛情故事的另一種叙述——論冰心未收集的短篇小説『惆悵』」という論文を配布し、この論文の内容をまとめた「漫談冰心幾篇佚文」という発表を行った。⁽⁴⁾ 本稿ではこの方氏の論文の内容を紹介し、それに対する疑問点、妥当性を検討したいと思う。なお、但し書きのない場合、方氏の論は「五四愛情故事的另一種叙述——論冰心未收集的短篇小説『惆悵』」によるものとする。

*
「惆悵」はこれまで海賊版の文集⁽⁵⁾にしか見られぬ作品とされ、

来歴も不明であったが、方氏によってこの作品が天津『益世報副刊』(以下『副刊』)に掲載されていることがわかった。天津『益世報』⁽⁶⁾は一九一五年十月に創刊された日刊紙で、天津版の他に北平版、西安版、上海版もあり、『申報』『民国日報』『大公報』といった著名な新聞と並び称されるほどの新聞であった⁽⁷⁾。『副刊』の他に『文学週刊』『語林』『別墅』『益世小品』等多数の副刊を出し、老舍、田漢、沈從文、洪深、兪平伯等の著名な作家たちが寄稿している。

『副刊』は一九二九年十一月一日から一九三〇年五月三十一日まで、全二三八期出された不定期の副刊で、文学批評や戯劇創作に関する文章、小説、翻訳作品、詩、書評等が掲載された。「惆悵」は第十八期から第二十五期(一九二九年十二月二日〜十二日)に毎回『副刊』の三分の一ほどのスペースを占めて連載されている。方氏はまず『副刊』と冰心の関係に目を向

け、以下のように述べている。

『副刊』の編集者と燕京大学の教師は非常に通じており、冰心一家との関係もかなり密接である。『副刊』の主要な寄稿者は、ほとんどみな燕京大学で教員を務めているし、冰心の三番目の弟謝冰季もこの副刊に三篇の文章「翠屏山」「寄妙曼」「滬寧途中」を発表している。それに冰心自身も『副刊』の主要な作家である。副刊の創刊号には彼女の長編詩「詩（往事集刊行以詩代序）」⁽⁹⁾が発表されているし、つづいて彼女の小説「惆悵」が八期に分かれて連載され、第一〇八期から第一二二期（一九三〇年四月十八日～五月八日）には、彼女が翻訳したジブランの散文詩集『先知』中の前半十三首の詩「船の来臨」から「論法律」までが連続して発表されている。一九三一年九月に出版された『先知』の序文にも『先知』の翻訳と『副刊』への掲載状況についての記載がある。⁽¹⁰⁾「惆悵」が名を騙った替え玉の偽作ではなく、冰心自身の作品であると思われる。

方氏はこのように「惆悵」を冰心作と認定した上で、今度は「惆悵」の内容に目を転じ、この作品に見られる恋愛、結婚観⁽¹¹⁾を「中国現代文学史と倫理道德変革史上において独特な意義」を持つものとし、他の同時代作家たちの作品や五四恋愛小説に

見られる結婚観と比較して、「五四の恋愛物語があまねく感傷的で感情に溢れている時に、大勢に応じず、世俗にへつらわず、『理性的結婚』の思考と表現を提示したというこの一点だけで、小説『惆悵』は五四恋愛物語の叙述史上、取って代わることのできない歴史的地位を占める」と高く評価している。また、その結婚観を冰心自身の結婚と引き比べ、夫呉文藻の書いた「求婚書」⁽¹²⁾と「惆悵」の共通点を挙げて、「倫理道德の規準から、五四倫理道德革命の主張で流行した『父母の取り決めた結婚に反抗し、自由恋愛で結婚する』という観念と行為のやり方の行き過ぎを是正し、『個人の自由』『理性的な選択』『父母の許し』という観念の主張と実行方法を提示したものだ」と考える⁽¹³⁾としている。

確かに冰心は一九二六年九月から一九三八年まで燕京大学国文系の講師を務めており、「惆悵」と同時期に掲載された作品には、熊佛西「論創作」、劉廷芳「兒童與青年指導」、許地山「近三百年來印度文学概観」等、燕京大学の教員たちの作品がある。また、冰心が『副刊』に作品を寄稿していたことも、『先知』序文によって確認できるし、「惆悵」に見られる結婚観も冰心自身の結婚観と共通する部分が多い。⁽¹⁴⁾

だが、筆者は方氏の挙げたこれらの論拠だけでは「惆悵」を

冰心の作品と断定できないと考える。『副刊』と「惆悵」にはいくつもの看過できない不可解な点があり、多くの疑問が残っているからである。その一つが「惆悵」連載初回のタイトル、署名（冰心女士）の後、本文の前に、挿入されている題注についてである。

（這篇是冰心女士一九二三年作品^{（ママ）} 一向珍藏着、現在全部披露想必是讀者所樂聞的吧。 虹君識）

この題注を書いた「虹君」がいかなる人物なのか不詳だが、これを信じるならば「惆悵」は一九二三年に執筆されたことになる。だが、一九二三年は冰心にとって非常に忙しい一年であった。冰心はこの年三ヶ月の時間を費やして四百あまりの元曲を読み、五月二十日に学士の学位論文「元代的戯曲」を完成させている。七月二十四日、『晨报副刊』編集者の孫伏園が冰心の提案を受け入れて「児童世界」専門欄を始めることにしたため、「給児童世界的小説者」の筆を執り、最初の「通訊」を執筆。この年だけで十二通の「通訊」を書いている。同時にアメリカ留学の事務手続きを行い、八月三日に北京を出発。上海から郵船ジャクソン号に乗ってアメリカに向かい、九月三日にシアトルに到着。九月十七日からウェルズリー女子大学の大学院で留学生生活を開始し、十一月下旬の感謝祭の前夜、突然吐血

して学校の病院に入院。十二月十五日ブルーヒルシャロンサナトリウムに転院し、翌年七月五日まで療養している^{（15）}。

方氏は「このように忙しい一年の内に、（中略）一体いつとここでこのような二万字におよぶ小説を書く時間を作ることができたのか」と疑問を呈しながらも、この問題を「冰心は才能溢れる、神業のように書ける作家である。我ら常人の眼で推測する事はできない」と片づけ、「惆悵」の執筆時期を、「一九二三年八月十七日から十一月下旬の間、つまり冰心がアメリカ留学へ向かう船上で呉文藻と出会った後から、ウェルズリー女子大学の大学院で病に倒れる前までの間」と推測している。

確かに冰心は一九一九年の文壇デビュー直後から精力的に作品を書き続け、その作品数は一九二三年までのわずか四年で小説三十二篇、詩三十四首^{（16）}、散文四十六篇に上る。一九二三年には詩七首、散文九篇^{（17）}、論文三篇を書いている。だが、これらの作品は卒業論文の「元代的戯曲」を除き、極めて短いものばかりで、だからこそ作品数が多いのだとも言えるのである。冰心が建國前に書いた小説のうち、最も長い「遺書」（一九二二年）や「悟」（一九二四年）でも二万二千字足らずなのに「惆悵」はおおよそ二万字の長さである。このような忙しい年にどうして異例の長さともいえる作品を書くことができたのか。疑

間を感じずにはいられない。

その上、題注によれば、多忙を極めた日々の中で苦心して書き上げたであろうこの小説は、六年もの間発表されなかつたことになるのである。冰心は一九二三年には一篇の小説も発表していない⁽¹⁸⁾。この時期、冰心の作品は『晨报副鐫』や『小説月報』等の著名な新聞、雑誌に発表され、大変な人気と注目を集めていた。一九二三年には一月に処女詩集『繁星』を、五月には処女小説集『超人』と詩集『春水』を次々に出版し、すでにベストセラー作家の道を歩み始めている。新聞、雑誌社は冰心の新作を求めたであろうし、もし小説を書いたのならば、発表する場はいくらでもあつたはずである。この時期の冰心の作品で、執筆から発表までこれほど時間のかかつた作品は他に見当たらない。題注からは「惆悵」を秘蔵していたのが天津『益世報』の編集者であるのか（一九二三年にはまだ『副刊』は創刊されていない）、冰心であるのかもわからず、秘蔵されるに至つた理由も不詳である。これは一体なぜなのか。

更に言うと、実は冰心は一九二三年八月二十五日に「惆悵」というタイトルの詩を書いているのである。この詩はアメリカへ向かう船上で書かれたもので、各連の末句が「我的心、／是如何的惆悵——無着！」で繰り返され、初めて親元を離れて未

知なる異国へと向かう不安と、母を求める気持ちとがストレートに表現されている⁽¹⁹⁾。

冰心は作品のタイトルに気を遣う作家である。長年に渡る作家活動で非常に多くの作品を残しながら、タイトルの重複はほとんど見られず、特に小説は作品数が少ないため、一篇の重複もない。詩「惆悵」と小説「惆悵」が同時期に書かれたのであれば、当然同じタイトルは避けるはずであろう。

それに、詩「惆悵」には母親を恋しく思う気持ちが描かれているが、小説「惆悵」は恋愛小説である。冰心は詩「惆悵」を書いた二日後に、今度は「紙船——寄母親」という詩を書いているし、また、その前後には「通訊」を大量に書いているが、実はこの「通訊」もまた母親に宛てて書いたものである⁽²⁰⁾。この時期の冰心の作品は母親宛てのものばかりといつても過言ではない。そうした作品と比較すると、小説「惆悵」はやはり異質と言わざるを得ない⁽²¹⁾。

このように「惆悵」に関する疑問は枚挙にいとまがないが、最大の謎は、小説「惆悵」が冰心の正版の文集、全集に収録されていないことである。方氏はこの点を「答えにくい問題」と述べるにとどめて具体的には考察していないが、これはやはり看過できぬ問題であろう。例えば一九三三年に北新書局より出

版された『冰心小説集』（冰心全集之一）は、当時巷に氾濫していた海賊版の文集に対抗するために、冰心自らがわざわざ作品を整理して編んだ全集であるが、⁽²²⁾「惆悵」は収録されていない。冰心が『冰心小説集』の編集を始めたのは、その序文等から考えて、一九三一年頃だと思われる。「惆悵」が発表されたのは一九二九年十二月で、それほどの月日は経っていないし、「惆悵」は当時の冰心の小説の中では最長の作品なのだから、全集を編む時にこの作品を漏らしてしまうというのは考え難い。それに、万一漏らしてしまったとしても、本当に『副刊』の編集者と燕京大学の教師が通じており、冰心一家との関係も密接なのであれば、誰かが漏れを指摘するのではないだろうか。しかし、「惆悵」は今に至るまでに出版された多種多様な冰心の文集、全集、そのいずれにも収録されていないし、「惆悵」に関する記述も残されていないのである。

もちろん何らかの理由があつて、冰心が意図的に「惆悵」の存在を無視し、自分の文集に収録しなかったことも考えられる。だが、「惆悵」は男女四人の四角関係（二重の三角関係）を描いた恋愛小説で、政治的な問題も見受けられないし、一旦発表しながらその作品を無視するという態度は、作者が作品に責任を持たないということであり、娘たちに「正直であれ」⁽²³⁾と

言い続けてきた冰心にはふさわしくないように感じられる。

*

以上、方氏の論文に対する筆者の疑問を列挙した。本稿は疑問点を提示しただけで、その解決や「惆悵」の真贋を明らかにするには至っていない。新資料の発見や今後の研究の進展を待ちたいと思う。なお、二〇〇四年八月に南開大学出版社、天津古籍出版社、天津教育出版社の三社によって、天津図書館所蔵の天津『益世報』を基にした影印本が出版された。『副刊』の編者等についてはこれから研究が進められるであろう。

注

- (1) 『お茶の水女子大学中国文学会報』第二十一号。
- (2) この研究会については虞萍氏が「冰心文学第二回 学術研究討論会」『中国文芸研究会会報』第二六八号（二〇〇四年二月二十九日）で紹介している。
- (3) 冰心は「惆悵」という詩を書いているが、但し書きがなければ「惆悵」は『益世報副刊』に掲載された小説を指すものとする。
- (4) 併せて『冰心全集』未収的幾篇佚文「介紹『冰心全集』未収的幾篇佚文」という資料、論文も配布された。

(5) 筆者が確認した海賊版は『冰心女士全集』上海合成書

店(一九三〇年)、『冰心全集』第一集、現代創作文庫、奉天文華書局(一九三九年)。いずれも中国国家図書館所蔵。この他、方氏によると『冰心女士全集並続編』上海合成書店も「惆悵」を収録している。

(6) ベルギー人神父の雷鳴遠によって創刊されたローマカトリック教会主編の中文日刊紙。宗教色はあまり強くなく、当時の社会情勢、重大事件等を客観的に報道した。九一八事変後は抗日愛国運動を支持し、民主政治を主張。一九四九年一月天津解放時に停刊。筆者が確認したのは中国国家図書館所蔵のマイクロフィルムで、原版は天津益世報館のもの。『益世報』『益世報副刊』については『上海図書館館藏中文報紙目錄 1862～1949』上海図書館編輯出版(一九八二年十二月)；伍傑主編『中文期刊大詞典』北京大学出版社(二〇〇〇年三月)；

来新夏「序言」、郭鳳岐主編『益世報』天津資料点校匯編』一～三、天津社会科学出版社(一九九九十二月)～二〇〇一年十二月)；林瑞琪「近代中国基督宗教辨報概況簡述」『鼎』第二十三卷総一二八期(聖神研究中心のHP

<http://www.hsstudy.org.hk/chineseschwebc-main.htm>

より二〇〇四年十一月十七日閲覧)等を参考にした。
(7) 前掲、『益世報』天津資料点校匯編』一の「序言」による。

(8) 本名は謝爲輯。(一九一〇年十月二十二日～一九八四年十一月四日)。

(9) この詩は、一九三〇年一月に開明書店より出版された作品集『往事』の序として作られたものであるが、『副刊』掲載の詩は大幅に書き換えられている。これについてはいずれ稿を改めて論じたいと考えている。

(10) 序文に「從那年四月十八日起，逐日在天津『益世報』文学副刊發表。不幸那副刊不久就停止了，我的訳述也没有繼續下去」とある。序文の執筆日は一九三一年八月二十三日。『先知』上海新月書店(一九三一年九月初版)未見。『全集』第二巻による。

(11) 小説「惆悵」の男性主人公薛炳星は「恋愛、結婚中の感情はむろん捨て去ることはできない」が、「感情は結局のところ当てにならないもの」で、だから理性で感情を「制裁」すると感情を「正しく使うことができる」と主張し、結婚について「私が主張するのは理性的な

結婚で、恋愛は理性に基づくものである。双方が互いに自分の結婚は家庭の幸せのためだけでなく、社会のために幸福をつくることもでき、前途に成し遂げるべき事業があるので、双方が永久に互いに助け合う必要があると考える。このように結婚を事業を成す手続きとするのは、もちろん普通の人を困らせる言い方だが、知識階級の人はこのような理想を持つべきだ。方法に至っては、この過渡期には、当然まず家族の賛成と承諾があつて、ようやく完全なものとなる。あのように双方が盲目的で浅はかな恋愛で、家族を顧みず、自分の一時の感情によるのは、私は絶対に賛成しない」などと述べている。

(12) 社会学者（一九〇一年四月十二日〜一九八五年九月二十四日）。米コロンビア大学への留学に向かう郵船ジャクソン号の上で冰心と知り合う。一九二九年二月に博士の学位取得し、帰国。燕京大学社会学系と清華大学で教鞭を執る。一九二九年六月十五日に結婚。

(13) 卓如編『冰心伝』上海文芸出版社（一九九〇年三月）三〇八〜三二三頁所収。方氏は『惆悵』を一九二六年に冰心がこっそり両親の机の上に置いた呉文藻の『求

婚書』と参照して読むとよい。私は『求婚書』が冰心と呉文藻の『共同謀議した作品』とする見方に賛成する。さらに『求婚書』が二〇年代の傑出した社会学者と文学者が一緒に発表した恋愛結婚の『宣言』と『宣誓』であるという理解に賛成する」と書いている。

(14) 筆者も前稿において「惆悵」に冰心の作品と類似する点や冰心の作品を連想させる箇所のあることを指摘している。こうした類似や、「惆悵」の主人公に炳星 (Bingxing) という、冰心 (Bingxin) を連想させる名前が付けられていることを、方氏は冰心の作品である証拠としてとらえているが、筆者は逆に偽作者が読者を欺くために取った小細工と考えていた。

(15) 方氏「五四愛情故事的な別種叙述——論冰心未収集の短篇小説『惆悵』」、卓如『冰心年譜』海峡文芸出版社（一九九九年九月）等を参照した。

(16) 「繁星」、「春水」は全節で一首とカウントした。

(17) 「通訊」（『寄小讀者』）は「二〇六」「七〇八」「一九〇」の三回にわけて『晨报副鐫』に掲載されたので、それぞれを一篇、合わせて三篇とカウントした。

(18) 冰心は「我的文学生活」『青年界』第二卷第三号

(一九三三年十月二十日)に「一九三三年秋、私はアメリカへ行った。この時の私の注意は小説にはなく、通訳に向けられていた。私は通訳の体裁で文章を書けば、対象があり、比較的気持ちを込めやすいと考えたのである。同時に通訳は最も自由で、一段の文章中にたゞさんの細々としたおもしろい出来事をはなすことができる」と書き、小説ではなく通訳に精力を傾けたことを説明している。

(19) なお、小説「惆悵」のタイトルは、作品の末文の「他們心中都起了一重覺悟歡喜的惆悵」から来ている。主人公とヒロインはそれぞれ別の友人(四人はそれぞれ親友であった)から思いを寄せられていたが、それに応えず、お互いと周囲の気持ちに整理がついて状況が整うのをじつと待ち、さらに両親の承諾を得て、ようやく結婚にこぎつける。その時「彼らの心のうちに覚悟と歡喜の惆悵(愁い悲しみ)がわきおこる」のである。この惆悵の情は「事業を成す手続き」として「理想的な結婚」をする二人の、その前途に対する喜びと、その理想ゆえの不安と、彼らの結婚によって失恋し、彼らの元を去っていく友人たちへの思いの混ざったも

のだと考えられる。

(20) 萩野脩二氏が「謝冰心の作家魂——一片の冰心」『日本中国学会報』第五十六集(二〇〇四年十月九日)の中で、『寄小讀者』は『小朋友們』などを念頭においていたのではなく、二十三歳の大学院生としての冰心が母親に宛てて書いたもの」であると指摘している。

(21) 「惆悵」が『副刊』に連載された一九二〇年代末から一九三〇年代にかけてであれば、冰心は男女の三角關係を扱った小説「三年」(一九三〇年)を書いているし、その後も「相片」(一九三四年)や「西風」(一九三六年)等、恋愛や結婚觀のうかがえる小説を発表している。題注に誤りがあり、「惆悵」は一九二三年の作品ではなく、もっと後の作品である可能性もある。

(22) 前掲、「我的文学生活」による。詳しくは前稿参照。

(23) 竹内実訳『女のひとについて』朝日新聞社(一九九三年九月二十五日)所収の吳青「私の母・冰心——娘から」による。吳青氏は冰心の次女。

(たがわ めぐみ・お茶の水女子大学大学院博士後期課程)